

委任統治期南洋群島における内地観光団（1937－1939年）

Tourist Parties in Micronesia under Japanese Mandate:1937-1939

千 住 一

はじめに

本稿の目的は、1922年4月から日本の委任統治下にあった南洋群島において実施された「内地観光団」（以下、観光団）のなかでも、1937年から1939年にかけて組織された3回の観光団に着目し、関連史料に依拠しながら各観光団の行程および参加者について整理することにある⁽¹⁾。

観光団とは、南洋群島における旧来からの住民（以下、住民）を参加者とし、数週間にわたって日本内地に滞在、各地を経巡ってから南洋群島へ帰還するというものであり、現時点で、1920年を除く1915年から1939年までのあいだに年1回実施されたことが確認できている⁽²⁾。

すでに筆者は別稿で、軍政期に実施された6回の観光団に関する詳細のほか⁽³⁾、委任統治期に組織された観光団のなかでも、1922年から1936年にかけて実施された15回の観光団の行程および参加者の詳細を明らかにした⁽⁴⁾。以下、1937年に実施された委任統治期における16回目の観光団、1938年に実施された第17回観光団、1939年に実施された第18回観光団の行程および参加者について整理する。

I 第16回内地観光団（1937年）

1. 行程

1937年に実施された第16回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、防衛省防衛研究所の所蔵史料が挙げられる⁽⁵⁾。以下、これらの史料にもとづいて第16回観光団の内地における行程を再構成したい。

まず、防衛省防衛研究所に所蔵されている「南洋群島民内地観光団ニ関スル件」という史料から見ていく⁽⁶⁾。これは、後に見るように観光団が内地へ到着する7月25日以前の7月7日付けで、南洋庁の監督省である拓務省から海軍省に向けて発信された文書であり、そこには、「南洋庁管内島民ノ民度向上ニ資スル為」、観光団を組織して「別紙日程表」にしたがって「観光」させることとなったので、「軍艦」、「三笠」、「横須賀工廠」の参観許可を得たい旨、記されている⁽⁷⁾。

【表1】は、上記した「別紙日程表」に相当する「観光団日程表」であり、それによると、観光団は7月25日に横浜へ到着し、東京、愛知、京都、大阪、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を訪れ、内地到着24日目の8月17日に横浜から出港する予定となっている。

次に、新聞報道に依拠しながら、実際の観光団の行動を可能な限り再構成すると、7月25日の7時に観光団を乗せた日本郵船近江丸が横浜に入港、一行はそのまま上京し、宮城遙拝の後に軍人会館へ投宿する。現時点では、拓務大臣と面会予定という報道を除いて⁽⁸⁾、東京滞在中の観光団について取り上げた新聞記事を発掘することができていないが、10月1日付け発行の雑誌『南洋群島』第3巻第10号の口絵には、一行が近衛第二連隊と新宿御苑を訪問

図1 近衛第二連隊および新宿御苑における第16回観光団（1937年）



出典）1937年10月1日付け発行『南洋群島』3（10）、口絵。

した際の集合写真が掲載されている【図1】。

続いて新聞に取り上げられているのは8月6日の出来事であり、一行は19時50分に京都駅へ到着、「河原町御池東入る」の日吉旅館に投宿している。京都では、7日に「矢尾政」で京都市長による午餐会と東本願寺および新京極の見学⁽⁹⁾、8日に比叡山および京都日日新聞社主催の納涼博覧会訪問がそれぞれ予定されているとの報道が見られる。

その後、一行は8日に大阪へ到着、9日に大阪朝日新聞社を訪れているが、その時の様子は次のように報じられている。「玄関横に垂れ下つてゐる軍用機献納運動の懸垂幔を見るなり〔中略：引用者注〕、真黒い顔の双眼を光らせ受付に飛込みわれもわれもと五十銭銀貨を投げ出し総計十四円を軍用機の一部にと差出した」⁽¹⁰⁾。

10日は18時半に省線山田駅へ到着、駅前の「高千穂旅館」に投宿し、翌11日は8時に伊勢神宮を参拝、市内を遊覧してから、15時に参急宇治山田駅を出発している。なお、伊勢参拝の様子を伝える『伊勢新聞』によると、一行は横浜上陸後、「東京、岡崎、安城、京都、大阪、奈良の各地を視察」したとある⁽¹¹⁾。

以上が、各新聞報道から再構成できる内地における観光団の行程および予定であるが、先述した拓務省から海軍省に送付された「観光団日程表」と比較すると、内地到着日、京都および大阪への到着日、伊勢の訪問日は予定どおりであったことが分かる。また、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には、第16回観光団の「内地着発ノ日ヲ除キタル内地滞在日数」が「22」と記載されていることから⁽¹²⁾、内地出発日に関しても予定どおり8月17日であったと推察される。

2. 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽¹³⁾、『南洋庁統計年鑑』には、第16回観光団の参加人数が24名で、その内訳はトラック支庁内の住民8名、ポナベ支庁内の住民15名、ヤルート支庁内の住民1名であることが記されており⁽¹⁴⁾、新聞報道も同様のことを伝えている。

次に参加者の属性を確認すると、新聞各紙に「村長」や「酋長」という報道が散見されるなか、特に『大阪朝日新聞』は、「村長さん、巡警、伝道士、青年団幹事、学生、農業、村吏など」と伝えている⁽¹⁵⁾。また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、観光団引率者として、早川という名前が新聞各紙に頻出する⁽¹⁶⁾。

ところで、南洋群島教育会発行の『南洋群島教育史』には⁽¹⁷⁾、「昭和十二年度より該事業〔観光団のこと：引用者注〕は、南洋文化協会に移管され」とある。この「南洋文化協会」であるが、『南洋群島教育史』の別の箇所では取り上げられている「南洋群島文化協会」という団体の一業務が「島民観光団の事務」となっていることから⁽¹⁸⁾、南洋群島文化協会のことであると判断できる⁽¹⁹⁾。

Ⅱ 第17回内地観光団（1938年）

1. 行程

（1）内地における行程

1938年に実施された第17回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、『南洋群島』に掲載された記事や、『日の光』に掲載された観光団参加者による手記「観光団日誌」（以下、第17回日誌）が挙げられる⁽²⁰⁾。

まず、『南洋群島』掲載記事であるが⁽²¹⁾、1938年8月1日付け発行の第4巻第8号に「南洋からの観光団：その日程表」という表題で、内地における訪問先および日程が掲載されている【表2】。後に見るように、7月30日に観光団が横浜へ到着していることを踏まえると、これは観光団実施前に作成された予定表であると推察されるが、それによると一行は、7月29日に横浜へ到着、東京、愛知、京都、大阪、奈良、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を訪れ、内地到着24日目の8月21日に横浜から出発することとなっている。

続いて【表3】であるが、これは、第17回日誌および新聞報道にもとづいて再構成した、観光団の内地における実際の行動内容や訪問先である。それによると一行は、7月30日に横浜へ到着した後、東京、愛知、京都、大阪、宝塚、奈良、伊勢、横浜、横須賀を経て、内地到着25日目の8月23日に横浜

から南洋群島へ向けて出発している。以下、第17回日誌の記述を中心に、新聞報道による補足を加えながら、【表3】だけでは見えてこない内地における一行のより詳しい様子を確認したい。

7月30日は⁽²²⁾、20時に横浜へ到着⁽²³⁾、上陸後は自動車で東京へ向い、二重橋前にて宮城遙拝を行った後、東京での宿舎となる軍人会館へ投宿するが、宮城遙拝時の様子は、「本で読んだ通り、本当にありがたさが胸一ぱいでした。[中略：引用者注] 天皇陛下のありがたいご恩を思ひうかべると涙ぐまずにいられませんでした」とある。

31日は⁽²⁴⁾、午前中に「神田のカトリック教会」を訪れ、午後に明治神宮を参拝する。その後は海軍館を訪問し、「新山中将閣中の飛行機や軍艦のお話」、「活動写真」、「東郷元帥の軍服や勲章」に触れる。17時に宿舎へ帰ってからは、「みんなで、国防献金のことを相談しました」。

8月1日は⁽²⁵⁾、拓務省と南洋庁東京出張事務所を訪れた後、海軍省にて「国防献金をおさめ」、日比谷公園で休憩をとる。この「国防献金」については各紙とも報道を行っており、それによると一行は60円を海軍省に納めた⁽²⁶⁾。午後からは、拓務大臣官邸、東京市役所、郵船ビルを訪れているが、拓務大臣官邸では、「管理局長さんのお話をきゝ、いろいろごちそうをいただきました」とある⁽²⁷⁾。

2日は⁽²⁸⁾、自動車で日本人造肥料工場を訪れて肥料の生産過程を、午後は日本油脂株式会社王子工場で石鹼の製造方法をそれぞれ実見する。その後は上野松坂屋に立ち寄ってから地下鉄で浅草へ行き、浅草観音を拝観したり、夕食をとったり、活動写真を観覧したりしている。

3日は⁽²⁹⁾、新宿御苑観覧、乃木神社参拝、近衛第三連隊見学、南洋貿易訪問という経路をたどっているが、南洋貿易では本社で「いろいろごちそうをいただきました」。

4日は⁽³⁰⁾、貯金局を訪れ、「私どもの貯金も皆こゝへ来るときいて感心しました」、その後に訪問した赤十字病院では、「負傷してゐる兵たいさんを見て、本当に心からお見舞いしたい気になりました」とそれぞれ書き留められている。昼食は「日比谷の美松食堂」でとり、靖国神社参拝後は、「南洋興

発会社からよばれて、夕はんをいただきました」とあるものの、会食場所は不明である⁽³¹⁾。夜は「宝塚レビュー」を観覧している。

5日は⁽³²⁾、上野動物園で「象、大蛇、河馬など見てびつくりし」、その後は専売局と国技館を訪問している。

6日は⁽³³⁾、品川の宮田製作所を訪れているが、「こゝは飛行機や自動車などをつくるところでした」とある。その後は東京飛行場で「たくさんの飛行機」を見学、多摩川園を経て、午後から「南拓のご親切で、雅叙園の庭園を見ました。それからごちそうをいただき、りつぱな部屋も見ました」⁽³⁴⁾。

7日は⁽³⁵⁾、第17回日誌には「三越へ行き、かへりは後樂園で野球を見ました」とだけ記されている。『東京朝日新聞』によると⁽³⁶⁾、この日の後楽園球場では、都市対抗野球大会の2回戦2試合が行われているが、一行がどちらの試合を観覧したかは不明である⁽³⁷⁾。

8日は⁽³⁸⁾、魚市場、製氷所、水産講習所、コプラ組合の順で訪れているが、コプラ組合では、「若松さんにお目にかゝり、なつかしく思ひました」とあるものの、「若松」の詳細は不明である。

9日は⁽³⁹⁾、東京を出発して岡崎へ移動、16時に芳野旅館へ投宿するが⁽⁴⁰⁾、その道中の様子は以下のように記されている。

途中の停車場は、出征する兵たいさんと、その見送り人で大へんにぎやかでした。兵たいさんも、見送りの人も、大へんな元気と熱心でした。私どもは「これだから日本軍は強いのだ」としみじみ感じました。

10日は⁽⁴¹⁾、岡崎種畜場や農場を見学し、「牛、豚、山羊、にわとりなどのやしない方をきゝました」。その後は、岡崎公園で「市長さんのごちそうをいただき」⁽⁴²⁾、続く板倉農場では「主人から廢物利用のお話をきゝ、本当に感心しました」。それから汽車で京都へ向かっているが、京都到着時刻は不明である。

11日は⁽⁴³⁾、京都市役所と本願寺を訪れた後、「八百政食堂で市長さんからのごちそうをいただきました」とある⁽⁴⁴⁾。

12日は⁽⁴⁵⁾、第17回日誌には植物園と清水寺を訪問したことのみのみが記されているものの、『大阪朝日新聞：京都版』は、植物園の後に「京都市観光係員の案内でJOスタジオを見学、はじめて知った大仕掛けなセットのからくりで驚嘆の眼をみはつた」と報じている⁽⁴⁶⁾。

13日は⁽⁴⁷⁾、「電車で比叡山に行きケーブルカーにのりました」。その後、琵琶湖側に下山し、船で大津へ移動、そこから電車で京都まで行き、さらに大阪へ向けて出発している。『大阪時事新報』によると、一行は18時10分には大阪駅着、「市観光係の案内で商都のすべてに眼をみはりつゝ西大和屋に落付いた」⁽⁴⁸⁾。

14日は⁽⁴⁹⁾、放送局を訪れ、「飛行機の音や、電車の音、波の音などの放送をきかして下さいました」。それから電車で浜寺の農業博物館へ向かっており、そこでの様子は、「天皇陛下のお作りあそばされたお米や、皇后陛下のおとりになつた生糸などを拝観し、両陛下が農業をおやりになることを、心からありがたく思いました」と綴られている。その後は海水浴や貝拾いをしてから高島屋へ行き、「屋根上の庭園で市街を見下し大阪市の広いこと、家の多いことにおどろきました」。夜は観光団の引率者から「橿原神宮の仕事」についての話があり、「一同は力一ぱい神宮のお仕事をお手伝し、国のためにはたらくことを決心して、床につきました」。

15日は⁽⁵⁰⁾、パナマ帽子製作所を見学し、「たばこ入をおみやげにいただきました」⁽⁵¹⁾。その後は「宝塚のレビュー」を観覧し、「こんなおもしろいものはないと思ひました」と記されているため、宝塚を訪問したと考えられる。

16日については、以下に全文を引用する⁽⁵²⁾。「今日はいよいよ橿原神宮の労働奉仕だといふので、一同いさんで出発しました。たくさんの青年団員が、男も女も一生けんめいはたらいっていました。私も先づ拝殿で参拝し、神鋤授与式があつて、それからやく二時間力一ぱいに働きました。すんでから日の丸べんとうをいただき、「今日は本当によかつた、労働奉仕の出来たことは、何よりもうれしい」と口々にかたりあいました。午後は電車で、伊勢の山田市にむかいました」。

こうした橿原神宮における観光団の様子は、『大阪朝日新聞：奈良版』が「南

洋の酋長さん／聖鋏手に「君が代」【図2】、『中央新聞』が「南洋の珍客も勤勞奉仕／酋長自ら陣頭に立つ」という見出しでそれぞれ取り上げている⁽⁵³⁾。また、『中央新聞』によると⁽⁵⁴⁾、一行は7時19分に「大軌上六発電車」で「樫原神宮建国奉仕」へ向かい、神宮参拝の後、「恭しく神前に額づき聖鋏を受け三千の奉仕員と共に勤行に参加、たくましい赤銅色の肌を炎熱にさらして感激裡に奉仕を続け午後四時山田に向つた」。

図2 第17回観光団の樫原神宮訪問（1938年）



出典)『大阪朝日新聞：奈良版』1938年8月17日付け5面。

17日は⁽⁵⁵⁾、伊勢神宮の外宮、内宮を参拝してから二見ヶ浦へ赴き、水族館を訪れる。その後は電車で奈良へ向かい、鹿、春日大社、大仏を観覧、「先生からおき、していた通り、大仏さまの大きいのにびっくりしました」とあるが、新聞各紙によると、一行は13時30分に参急宇治山田駅を出発、15時50分に大軌奈良駅へ到着し、公会堂で鹿寄せを見学してから、春日大社、三月堂、大仏などを見て回っている⁽⁵⁶⁾。奈良見物後は、「電車のまどから、ひろいひろい畑やたんぼをながめながら、夕方大阪にかへりました」。

18日は⁽⁵⁷⁾、鐘紡株式会社で工場を見学、「おひるには市役所のごしんせつで中央公会堂でごちそうをいただきました」。その後は大阪朝日新聞社を訪問、

新聞が印刷される様子を実見している。

19日は⁽⁵⁸⁾、8時半に大阪駅へ到着、横浜に向けて出発するが⁽⁵⁹⁾、大阪駅での様子は次のように記されている。「出征兵士幾千人となくのつているのを見ました。しつかりとした兵たいさんだち^{ママ}の顔つきを見ると、ほんやりとあちらこちらを見物してあるくのが、まことにすまないように思ひました。心から兵たいさんだちにおれい^{ママ}を、いいたい気になりました」。

また、一行は19時過ぎに横浜へ到着しているが、車中での様子は、「午後四時ごろ美しい富士山のすがたを見ることが出来ました。えはがきなどで何べんも見てゐるふじ山の美しさは、まことになつかしく思はれました」と綴られている。

20日は⁽⁶⁰⁾、南洋油脂株式会社を訪れた後、「しんさい記念館」で「大正十二年の大しんさいの時のお話と、かなしい有様のしやしんを見せていただきました」。それから、「横浜記念館へ行つて、横浜市役所のごちそうをいただきました」。

21日は⁽⁶¹⁾、「田代さん〔観光団引率者のこと：引用者注〕につれられて、野澤屋に行き、いろいろの買物^{ママ}をしました。みんな思い思いのおみやげを買いました」とある。

22日は⁽⁶²⁾、横須賀鎮守府を訪れ、「飛行機のとぶのを見」たり、「軍艦をつくるところを見学」したほか、「山城艦を拝観し、つづいて三笠艦を拝観しました」。

23日は⁽⁶³⁾、「「かえりたくないなあ、もつと見たいものだねー、内地の人に生まれたかつたなー」などと、口々に話あいながら、とにかく、帰へるしたくをしました」。それから一行は、山城丸に乗船して横浜を出発するが、港には南洋庁東京出張事務所の関係者が見送りに来ていた⁽⁶⁴⁾。

以上が、第17回日誌および新聞報道から再構成した内地における観光団の行動内容であるが、先述した『南洋群島』掲載の予定表「南洋からの観光団」と実際の行程との相違について確認しておく、一行は予定よりも1日遅れて内地に到着し、予定よりも1日長く内地に滞在した。また、内地での訪問先については、訪問日の前後は看取されるものの、ほぼ予定どおりに実施さ

れたと言えるが、特に大阪では訪問日の変更が著しい。

なお、8月16日に実施された檀原神宮訪問であるが、13日付け『大阪朝日新聞：京都版』には、観光団が「“檀原神宮の聖域拡張工事にわれわれの汗と力を奉仕させて下さい”と申出て感激の話題を提供した」という記述や、「聖地檀原で勤労奉仕をさせていたゞくことになったのはなにより嬉しいことです」という、ある参加者によることばが記載されている⁽⁶⁵⁾。このことから、『南洋群島』掲載の予定表に記載されていなかった檀原神宮訪問は、観光団が内地に到着してから実施が決定した出来事であったと考えられる。

（２）内地着発前後の行程

第17回日誌には、内地滞在中のみならず内地着発前後の記述も含まれているため、ここではそれらの内容について確認したい。

第17回日誌は、7月18日のパラオから記述が始まる。18日は南洋庁で「地方課長さんや、支庁長さんからいろいろなご注意をうけて、いこま丸にのりこみ」⁽⁶⁶⁾、パラオを出発する。19日はヤップに到着、上陸してヤップからの観光団参加者と合流するとともに、ヤップの様子について、「おなじ南洋の島ではありますが、やはり他国のやうな気がしました」と書き留められている⁽⁶⁷⁾。

19日の次の記述は24日となっているためヤップ出発日は不明であるが、24日は⁽⁶⁸⁾、テナアンへ到着したものの強風のために上陸を見合わせ、夕方にサイパンへ到着、上陸している。サイパンでは、砂糖工場を見学した後、サイパンからの参加者と合流してから、「一同サイパン神社におまいりして、船にかへりました」とあるほか⁽⁶⁹⁾、「はじめて神社に参拝した私は、やはりありがたい気持ちが一ぱいでした」と綴られている。

24日の次の記述は26日となっており⁽⁷⁰⁾、26日にサイパンを出発したことが記されてるものの、以降、横浜に到着する30日までの記述は存在しない。

以上より、後に見るようにパラオ、ヤップ、サイパンの各支庁内に居住する参加者によって構成された観光団は、まずパラオからの参加者がヤップへ移動してヤップからの参加者と合流、次いでパラオとヤップからの参加者が

サイパンへ移動してサイパンからの参加者と合流、そして全参加者がサイパンから内地へ向かい、パラオ出発12日目、サイパン出発5日目に横浜へ到着したことが分かる。

一方、8月23日に横浜を出発してからは、24日から27日まで船中で過ごししており⁽⁷¹⁾、25日に小笠原付近を通過したこと、27日に「茶話会で鳥々の踊りを見ていただ」いたことなどが綴られている。

28日はサイパンに到着、サイパンからの参加者と別れた後に、「武道の試合を見ました」とある。28日の次の記述は31日となっており、31日と9月1日は船中、2日はヤップに到着、ヤップからの参加者と別れた後にヤップを出発する。3日はパラオに到着、4日については「休みました」とだけ記されている。5日は、8時半に南洋庁へ集合して引率者からの訓示があったほか、支庁で「光安係長さんに、ごあいさつをしました」⁽⁷²⁾。その後、引率者に「あつくお礼をのべて別れ」たところで、第17回日誌の記述は終わる⁽⁷³⁾。

以上より、横浜を出発した観光団は、横浜出発6日目にサイパン、11日目にヤップ、12日目にパラオと、往路とは逆の順番で南洋群島内を移動し、参加者はそれぞれの居住地で観光団から離脱していったことが分かる。

2. 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽⁷⁴⁾、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には、第17回観光団の参加人数が21名で、その内訳はサイパン支庁内の住民5名、ヤップ支庁内の住民4名、パラオ支庁内の住民12名であることが記されており⁽⁷⁵⁾、多くの新聞報道や第17回日誌にも同様の記述が看取される。

次に、参加者の属性を確認すると、多くの新聞が「酋長」という見出しを掲げながら観光団の動向を報じているが、『大阪朝日新聞：京都版』と『大阪朝日新聞：奈良版』には詳細な記述が見られ、それぞれ、「農業九名、コブラ製造三名、大工三名、巡警三名、興発会社傭人、青年団長、学生各一名」といふ顔ぶれだがいづれも達者な日本語、「巡警三人、コブラ製造業二人、農業九人、大工三人、青年団長、コブラ仲買人、学生、興発会社員各一人」とある⁽⁷⁶⁾。

なお、南洋群島教育会発行の『南洋群島教育史』には⁽⁷⁷⁾、「[昭和：引用者注] 十三年度より、公学校及木工徒弟養成所優良卒業生を各支庁一名宛旅費其の他を全部支給して[観光団に：引用者注] 参加せしむる途も開かれた」とあるが、上記した報道におけるいずれかの「大工」が「木工徒弟養成所優良卒業生」に該当すると考えられる。

また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、若旅、田代、家入といった名前が各史料に頻出する⁽⁷⁸⁾。

ところで、『読売新聞』は、第17回観光団を「“非常時観光団”」と呼称した上で、引率者の若旅が語ったことばとして、次のような談話を紹介している。「[観光団参加者は：引用者注] 殆ど日本語が出来るので何不自由ないものばかりです、日本観光は初めてですが年齢は十六歳から五十七歳で将来島民を指導して行く模範人物揃ひです、今回の旅行は日本精神を植ゑつけるのが目的で、各地の神社を参拝したり、南洋産業に関する工業会社を見学します」⁽⁷⁹⁾。

Ⅲ 第18回内地観光団（1939年）

1. 行程

1939年に実施された第18回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道、防衛省防衛研究所の所蔵史料、『南洋群島』に掲載された観光団参加者による手記が挙げられる⁽⁸⁰⁾。以下、これらの史料にもとづいて第18回観光団の内地における行程を再構成したい。

まず、防衛省防衛研究所に所蔵されている史料から見ていくと、後に確認するように観光団が内地に到着する8月7日以前の7月22日付けで、今年も「観光団ヲ組織シ別紙日程ニ依リ観光致サセ度予定」であるため、近衛歩兵第一連隊、宮田自転車蒲田工場、第一陸軍病院の参観許可を得たい旨、南洋庁から陸軍省に対して申し入れが行われている⁽⁸¹⁾。

【表4】が「別紙日程」に該当する「昭和十四年度観光団日程」（以下、予定第一報）であるが⁽⁸²⁾、それによると、観光団は8月6日に横浜へ到着し、

研究ノート

東京、愛知、京都、大阪、奈良、伊勢、横浜、横須賀を訪れ、内地到着20日目の25日に横浜から出港する予定となっている。

なお、南洋庁から陸軍省宛に発信された上記文書では、観光団参加者および住民の状況が以下のように記されている。

彼等〔観光団参加者のこと：引用者注〕ハ何レモ〔南洋群島：引用者注〕各島ニ於ケル^{ママ}智識階級ニ属スル中心連ニシテ帰島後ノ感想文其ノ他ニ観ルモ何レモ〔南洋群島：引用者注〕島内改善ニ不少留意セムトスルモノ有之精神開発ノ効顯著ナルモノ有之候殊ニ今事変ニ際シテハ〔南洋：引用者注〕群島島民モ卒先国防献金ニ、皇軍ノ慰問ニ銃後ノ守リヲ致シ居リ島民中熱心ニ従軍ヲ希望シ或ハ国籍ヲ要望スル者モ多々有之現況ニ有之候⁽⁸³⁾

次いで、観光団内地到着1週間前の8月1日付けで、「便船等ノ都合ニ依リ」、7月22日付けで送付した日程を「別紙」のとおり変更したいとの申し出が、南洋庁から陸軍省に対して行われる⁽⁸⁴⁾。

【表5】が「別紙」に該当する「昭和十四年度観光団日程」（以下、予定第二報）である⁽⁸⁵⁾。予定第一報と予定第二報を比較してみると、観光団の横浜到着予定日に8月6日から変更はないものの、横浜出発予定日が内地到着20日目から18日目の23日に前倒しされている。また、横浜到着後の移動経路については、東京、京都、大阪、奈良、伊勢、愛知、横浜、横須賀と、愛知の訪問時期が東京と京都のあいだから伊勢と横浜のあいだへ移動している。その他、訪問予定先の組み替えが多数見受けられるほか、8日に予定されていた「第一陸軍病院慰問（牛込）」と24日に予定されていた「海軍病院」が消失し、7日の「丸ノ内市街」と15日の「京極夜景」が追加されている。

これに対し、陸軍省は8月8日付けで回答を行っているが⁽⁸⁶⁾、それによると、8月11日に日産化学工業株式会社王子工場と近衛歩兵第一連隊⁽⁸⁷⁾、12日に株式会社宮田製作所蒲田工場の観覧が許可されており、近衛歩兵第一連隊の訪問日程に関しては南洋庁の要望どおりにはならなかったことが分かる。

続いて、新聞報道に依拠しながら、実際の観光団の行動を可能な限り再構成すると、8月7日の11時に一行を乗せた日本郵船横浜丸が横浜へ到着する。その後は、14日の16時15分に「臨時特急つばめ」で京都駅へ到着、「日吉屋旅館」に投宿する。15日については、京都市役所訪問前に桃山御陵を参拝予定との報道が見られ、16日は比叡山と大津を訪れた後、17時55分に省電で大阪駅へ到着、「西大和屋旅館」に投宿している。

17日は鐘紡淀川工場、公会堂、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社を訪問したほか、鐘紡淀川工場見学後に大阪市長主催の午餐会へ出席予定との報道が見られる⁽⁸⁸⁾。19日は17時37分に省線山田駅へ到着、駅前の「高千穂館」に投宿するが、大阪から山田へ向かう途上で奈良へ立ち寄り、「市内巡覧ののち午後二時から公会堂の鹿寄」を見物予定であると報じられている⁽⁸⁹⁾。

20日は、8時半に伊勢神宮を参拝、二見ヶ浦を遊覧した後、13時12分に二見ヶ浦駅を出発、16時39分に省線岡崎駅へ到着する。その後は自動車で岡崎公園へ移動、岡崎市長の案内で天守閣跡などを見学し⁽⁹⁰⁾、「巽閣」で市および商工会議所が主催する歓迎茶話会に出席、「芳野旅館」へ投宿した。

以上が、各新聞報道から再構成できる内地における観光団の行程および予定であるが、『南洋群島』に掲載された観光団参加者による手記「内地観光から帰つて」によると⁽⁹¹⁾、一行は、造船所、鉄工所、紡績工場、専売局、新聞社、肥料工場、貯金局、二重橋前、靖国神社を訪れているほか、1939年10月1日付け発行の『南洋群島』第5巻第10号口絵には、「群島内地観光団行動一瞥」として、軍艦三笠、奈良公園、大阪朝日新聞社、東京の松坂屋で撮影された観光団の写真4葉が掲載されている【図3】。これらにより、観光団は東京各所のほか、横須賀鎮守府と奈良を実際に訪問したと考えられる。

図3 内地各地における第18回観光団（1939年）



出典) 1939年10月1日付け発行『南洋群島』5 (10)、口絵。

なお、「内地観光から帰つて」には、8月26日まで内地に滞在したとの記述があるほか⁽⁹²⁾、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には第18回観光団の「内地着発ノ日ヲ除キタル内地滞在日数」が「18」と記載されているため⁽⁹³⁾、一行は内地到着20日目の26日に南洋群島へ向けて出発したと考えられる。

ここで、先に整理した観光団の予定と実際の行程の整合性を確認しておくと、内地到着日に関しては予定よりも1日遅く、内地滞在日数については予定第一報と同じ20日間となった。また、京都、大阪、伊勢、岡崎への移動日は予定第二報どおりとなっているため、東京の滞在日数は両予定よりも1日短くなった一方で、岡崎以降の滞在日は予定第二報よりも2日長くなった。その他、一行の訪問先に関してであるが、判明しているものについては予定どおり実施されたと言えよう。

2. 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽⁹⁴⁾、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には第18回観光団の参加人数が18名で、その内訳はトラック支庁内の住民7名、ポナペ支庁内の住民8名、ヤルート支庁内の住民3名であることが記されており⁽⁹⁵⁾、新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に、参加者の属性を確認すると、多くの新聞が酋長、村書記、巡警、農業、大工と伝えるなか、『京都日日新聞』は次のような報道を行っている。「日本式の教育を受けたいはゞ常夏の知識階級であり、瀟洒な夏の背広にパナマ帽といふいでたち、却々の好男子揃ひである」⁽⁹⁶⁾。

また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、加藤勝吉、佐藤直助、坂本末松といった名前が新聞各紙に頻出する⁽⁹⁷⁾。

ところで、新聞各紙は、第18回観光団の動向を当時の時局と絡めて報じる傾向が強かった。例えば、『大阪時事新報』は「聖戦下の内地見学に来朝した南洋の酋長さん」⁽⁹⁸⁾、『大阪毎日新聞：愛知版』は「一行は戦時下の内地が如何にも余裕綽々たるのに驚いてゐた」と伝えるほか⁽⁹⁹⁾、『大阪朝日新聞』は「南洋の酋長さんら／銃後の緊張に感嘆」⁽¹⁰⁰⁾、『伊勢新聞』は「伊勢神宮

研究ノート

に参拝／日本精神を体得／南洋の青壮年参宮」という見出しをそれぞれ掲げながら、観光団の様子を取り上げている⁽¹⁰¹⁾。また、『京都日日新聞』は、「戦争をしてゐるといふのにどこへ行つてもそのやうな心配すら感じられず平和な時とかはりなくあらゆる機関が整然と活動してゐるのにはむしろ驚きました」という、ある参加者のことばを紹介している⁽¹⁰²⁾。

先に言及した、『南洋群島』収録の観光団参加者による手記「内地観光から帰つて」にも同様の記述が看取され、そこでは以下のように綴られている⁽¹⁰³⁾。

内地ニモ戦争ノ気分ガアルカト思ヒマシタガ、一度内地ニ行キマスト都會ニ於テモ、田舎ニ於テモ、工場ニ働イテ居ル人モ、農業ヲシテ居ル人モ、会社ニ勤メテ居ル人モ、日本ガ今戦争ヲシテ居ルト謂フ気分ハ少シモ見受ケラレナイバカリデナク、男女年寄り子供モ平氣デ落^{ママ}チ付イテ、皆メイメイノ仕事ニ勢ヲ出シテ居マスノデ、日本ノ力強イコトニ感謝シマシタ。

その他、「内地観光から帰つて」では、手記の副題に「村の島民同胞に訴ふ」とあるように、著者が居住する「ポナペ島マタラニーム島」の住民に対して、天皇制を信奉すること、公德心や責任観念を涵養すること、女性が労働に従事すること、村の仕組みを自発的に改善すること、節約して貯蓄を行うことなどの重要性が、観光団によって得られた内地での見聞にもとづきながら説かれている。

おわりに

ここまで、1937年から1939年にかけて実施された3回の観光団の行程および参加者の詳細について、各史料に依拠しながら整理した。以下、これまでの委任統治期観光団に関する成果を踏まえつつ、その概要を整理する⁽¹⁰⁴⁾。

まず行程であるが、1937年実施の第16回観光団は24日間内地に滞在し、横浜、東京、愛知、京都、大阪、奈良、伊勢を実際に訪れたと考えられるほか、

宝塚、横須賀の訪問と横浜からの出港が予定されている。1938年実施の第17回観光団は25日間内地に滞在し、横浜、東京、愛知、京都、滋賀、大阪、宝塚、奈良、伊勢、横浜、横須賀を実際に訪れ、横浜から南洋群島へ帰還した。1939年実施の第18回観光団は20日間内地に滞在し、横浜、東京、京都、滋賀、大阪、奈良、伊勢、愛知、横須賀を実際に訪れたほか、横浜からの出港が予定されている。

これらより、内地滞在日数については3回とも3週間前後であったことが分かるが、結果的に、委任統治期において実施された観光団の内地滞在日数はすべて3週間前後となった⁽¹⁰⁵⁾。また、内地訪問先に関しては、第16回以降、奈良を訪れているが、観光団が奈良を訪問したのは1924年以来のことである。なお、伊勢は1935年、名古屋を除く愛知は1936年の観光団から見られるようになった訪問先である⁽¹⁰⁶⁾。

次に参加者であるが、人数に関しては24名、21名、18名という推移をたどっており、委任統治期における過去の観光団と比較して特に顕著な変動は認められない⁽¹⁰⁷⁾。性別については3回とも全員男性であり、結果的に、委任統治期において実施された観光団は1922年と1925年を除いて、参加者がすべて男性となった。また、『南洋群島教育史』に記載されているように、第17回以降は、金銭的な負担なしで観光団に参加した住民が存在したと考えられる。

続いて各観光団の特徴を見ておくと、第16回に関しては、8月9日の出来事を指摘したい。つまり、大阪朝日新聞社を訪問した一行が「軍用機献納運動」に共鳴したとされる場面であるが、ここからは、南洋群島からの観光団が内地において時局と関係していく姿とともに、そうした観光団のありようを取り上げる際に当時の新聞報道が依拠していた「視線」が看取される。

第17回においても、時局と観光団の関わりやそれをめぐる表象を見て取ることができる。8月1日の国防献金については言うまでもないが、特に、8月4日の赤十字病院、9日のとある停車場、19日の大阪駅での描写は、これまでの観光団日誌では見ることでできなかった類の記述である。また、先に指摘したとおり、観光団は前回から1924年以来に奈良を訪れているが、1924年の第3回は東大寺周辺を見物しただけであった。それに対して第17回は、当時、

研究ノート

皇紀二千六百年記念事業の一環として行なわれていた樫原神宮拡張工事に「建国奉仕隊」の一員というかたちで関わり、新聞各紙もその様子を積極的に取り上げた⁽¹⁰⁸⁾。その他、第17回の行程には、南洋貿易、南洋興発、南洋拓殖といった南洋群島関連企業が関与するとともに、参加者には南洋興発関係者が含まれていた。

時局と関わる観光団とそれに関する描写は、第18回においても同様に看取される。観光団実施に先立って南洋庁が作成した文書における記述は指摘するまでもなく、内地における一行の動向を報じた新聞各紙の論調も、第17回の際の表現を借りるならば、「非常時観光団」という枠組みに依拠するものであった。加えて、『南洋群島』に掲載された参加者による手記では、内地での経験が南洋群島へ持ち帰られるだけではなく、それが時局と関連づけられて、文字どおり「村の島民同胞に訴」えるというかたちで提示されている。

本稿をもって、委任統治期に実施された全18回の観光団の行程および参加者に関する素描は完了となる。次の課題は、委任統治期だけではなく軍政期も含めたかたちで、日本統治下南洋群島において組織された観光団の全体像を整理し直すことと、そこから看取される連続性／非連続性や政策的特徴を日本による南洋群島統治という文脈のなかに位置づけていくことにある。

謝辞

故山口洋児氏および辻原万規彦先生（熊本県立大学）からは、本稿で取り上げた3回の観光団に限らず、委任統治期に実施された複数の観光団に関わる史料の提供を受けた。ここに記して謝意を示したい。

注

- (1) 依拠する史料の成立背景上、今日では使用が躊躇されている表現が引用されている場合がある。史料引用に際して、旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは省略した。地名については、当時の南洋群島における一般的な呼称を使用した。南洋庁関係者の詳細については、以下の文献を参考にした。日本図書センター（1997）。

- (2) 日本は1914年からアジア太平洋戦争期に至るまで、実質的に南洋群島を統治した。本稿では、1914年から1922年3月までの臨時南洋群島防備隊による統治期間を軍政期、1922年4月以降の南洋庁による統治期間を委任統治期と呼称する。
- (3) 千住（2009）。
- (4) 千住（2012a）、千住（2012b）、千住（2013）、千住（2014a）、千住（2014b）。
- (5) 第16回に関しては、過去の観光団ではほぼ毎回見られた参加者による日誌が雑誌『日の光』に掲載されていないが、その理由は不明である。
- (6) 拓務次官萩原彦三より海軍次官山本五十六宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1937年7月7日（防衛省防衛研究所所蔵『昭和十二年公文備考E：教育（演習）、検閲』2）。
- (7) これに対して海軍省は、観覧を許可する旨を7月12日付けで拓務省に回答している。海軍省次官より拓務次官宛「南洋群島島民横須賀軍港見学ノ件回答」1937年7月12日（防衛省防衛研究所所蔵『昭和十二年公文備考E：教育（演習）、検閲』2）。
- (8) 当時の拓務大臣は、大谷尊由。
- (9) 当時の京都市長は、市村慶三。
- (10) 『大阪朝日新聞』1937年8月10日付け夕刊2面。
- (11) 『伊勢新聞』1937年8月12日付け2面。
- (12) 南洋庁長官官房文書課（1939：150）。
- (13) 千住（2006：60）。
- (14) 南洋庁長官官房文書課（1939：150）。
- (15) 『大阪朝日新聞』1937年8月10日付け夕刊2面。
- (16) 早川は、南洋庁交通課通信書記の早川曾左衛門であると考えられる。早川曾左衛門は、1926年と1929年に実施された観光団を引率している。
- (17) 南洋群島教育会（1938：352）。
- (18) 南洋群島教育会（1938：445）。
- (19) 『南洋群島教育史』の記述に依拠して南洋群島文化協会について整理すると、南洋群島文化協会は、1923年5月23日に設置された南洋協会南洋群島支部の業務を引き継ぐかたちで、1937年4月1日に設立され、その目的を「南洋群島ニ於ケル文化ノ向上並住民ノ福祉ヲ図ル」こととしていた。なお、南洋群島文化協会の本部は南洋庁地方課内に、支部はサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ボナペ、ヤルートの各支庁内、テニアンおよびロタ出張所内のほか、「アンガウル南拓鉱業所内」にも置かれた。南洋群島教育会（1938：444-448）。
- (20) アルボコン（1938）。著者名に「パラオ」という肩書きが付されているが、これは著者の居住地であると考えられる。
- (21) 南洋群島（1938）。

- (22) アルボコン (1938 : 23)。
- (23) 各新聞報道によると、一行は日本郵船の生駒丸で横浜へ入港した。
- (24) アルボコン (1938 : 24)。
- (25) アルボコン (1938 : 24)。
- (26) 『読売新聞』によると、献金の名目は「海軍将兵慰問金」であった。『読売新聞』1938年8月2日付け夕刊2面。また、観光団の東京出発後に発行された『名古屋新聞』には、一行が「百二十円を陸海軍両省へ国防献金した」との記述が見られる。『名古屋新聞』1938年8月10日付け6面。
- (27) 当時の拓務省管理局長は、副島勝。
- (28) アルボコン (1938 : 24-25)。
- (29) アルボコン (1938 : 25)。
- (30) アルボコン (1938 : 25)。
- (31) 後に確認するように、観光団参加者には南洋興発関係者が含まれていた。
- (32) アルボコン (1938 : 25)。
- (33) アルボコン (1938 : 25)。
- (34) 「南拓」とは、南洋拓殖株式会社の略称である。
- (35) アルボコン (1938 : 25)。
- (36) 『東京朝日新聞』1938年8月8日付け8面。
- (37) 第一試合は大連対川崎の試合が13時30分から16時まで、第二試合は釜石対東京が第一試合に続いて行われているが、5回裏で降雨のため中止となっている。なお、第一試合は7対5で大連が勝利し、第二試合は翌日に再試合となった。『東京朝日新聞』1938年8月8日付け朝刊8面。
- (38) アルボコン (1938 : 25-26)。
- (39) アルボコン (1938 : 26)。
- (40) 『名古屋新聞』によると、一行は16時20分に岡崎駅着、芳野旅館の所在地は伝馬町である。『名古屋新聞』1938年8月10日付け6面。
- (41) アルボコン (1938 : 26)。
- (42) 当時の岡崎市長は、菅野経三郎。
- (43) アルボコン (1938 : 26)。
- (44) 当時の京都市長は、市村慶三。
- (45) アルボコン (1938 : 26)。
- (46) 『大阪朝日新聞：京都版』1938年8月13日付けB13面。
- (47) アルボコン (1938 : 26-27)。
- (48) 『大阪時事新報』1938年8月14日付け3面。
- (49) アルボコン (1938 : 27)。
- (50) アルボコン (1938 : 27-28)。
- (51) 『大阪時事新報』によると、一行は8時に「住吉区桑津町のパナマ商会工場」を訪れている。『大阪時事新報』1938年8月16日付け3面。

- (52) アルボコン（1938：28）。
- (53) 『大阪朝日新聞：奈良版』1938年8月17日付け5面。『中央新聞』1938年8月17日付け夕刊2面。
- (54) 『中央新聞』1938年8月17日付け夕刊2面。
- (55) アルボコン（1938：28）。
- (56) 『大阪時事新報』1938年8月18日付け夕刊2面。『大阪朝日新聞：奈良版』1938年8月18日付け5面。
- (57) アルボコン（1938：28-29）。
- (58) アルボコン（1938：29）。
- (59) 『大阪時事新報』によると、一行は9時30分に大阪駅を出発している。『大阪時事新報』1938年8月20日付け夕刊2面。
- (60) アルボコン（1938：29-30）。
- (61) アルボコン（1938：30）。
- (62) アルボコン（1938：30）。
- (63) アルボコン（1938：30-31）。
- (64) 第17回日誌は、内地を去るにあたって、「内地の人だちの大へん親切なことに」、「男も女もよくはたらくこと」、「機械の力の大きいこと」を内地で「何よりも強く感じた」とまとめている。
- (65) 『大阪朝日新聞：京都版』1938年8月13日付けB13面。
- (66) 当時の南洋庁地方課長は、麻原三子雄。当時のパラオ支庁長は、高坂喜一。
- (67) 8月18日および19日の記述の出典は以下のとおり。アルボコン（1938：22）。
- (68) アルボコン（1938：22）。
- (69) サイパン神社とは、1914年11月3日にガラパンで創立した彩帆神社のことであると考えられる。彩帆神社については、以下を参照のこと。曾根（2003）。
- (70) アルボコン（1938：22-23）。
- (71) 8月24日から27日までの記述の出典は以下のとおり。アルボコン（1938：31-32）。
- (72) 光安は、パラオ支庁所属の光安国男であると考えられる。光安国男は、1927年と1935年に実施された観光団を引率している。
- (73) 8月28日から9月5日までの記述の出典は以下のとおり。アルボコン（1938：32）。
- (74) 千住（2006：60）。
- (75) 南洋庁長官官房文書課（1940：140）。
- (76) 『大阪朝日新聞：京都版』1938年8月13日付けB13面。『大阪朝日新聞：奈良版』1938年8月17日付け5面。
- (77) 南洋群島教育会（1938：352-353）。

- (78) 若旅は南洋庁警務課警部の若旅壽憲廣、田代は南洋庁交通課の田代世紀二郎であると考えられるが、家人については不明である。田代世紀二郎は1933年に実施された観光団を引率している。
- (79) 『読売新聞』1938年7月31日付け7面。
- (80) アントン (1940)。著者名に「ボナベ島マタラニーム村」という肩書きが付されているが、これは著者の居住地であると考えられる。なお、この手記の著者と思われる参加者が、『伊勢新聞』紙上で「私は十年前に一度内地へ来たことがあり今度は二度目である」と語っている。『伊勢新聞』1939年8月21日付け3面。また、第18回に関しては、過去の観光団でほぼ毎回見られた参加者による日誌が『日の光』に掲載されていないが、その理由は不明である。
- (81) 南洋庁長官北島謙次郎より陸軍次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1939年7月22日（防衛省防衛研究所所蔵『壹大日記』昭和14年8月）。なお、当該史料では第一陸軍病院に関する記述が縦線で消されており、本文書の発信以降に何らかの理由で第一陸軍病院への訪問が取りやめになったと推察される。
- (82) 南洋庁長官北島謙次郎より陸軍次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1939年7月22日に付属の「昭和十四年度観光団日程」（防衛省防衛研究所所蔵『壹大日記』昭和14年8月）。
- (83) ここでいう「今事変」とは、1937年に勃発した日中戦争のことを指すと考えられる。また、日本は南洋群島の住民に対して、「日本帝国臣民とは其の身分を異にし、帰化、婚姻等其の本人の意志に依り、正規の手續を履まなければ、日本帝国臣民たる身分を取得することが許されない」という立場を採用していた。南洋庁（1932：11）。
- (84) 南洋庁東京出張事務所より陸軍次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1939年8月1日（防衛省防衛研究所所蔵『壹大日記』昭和14年8月）。
- (85) 南洋庁東京出張事務所より陸軍次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1939年8月1日に付属の「昭和十四年度観光団日程」（防衛省防衛研究所所蔵『壹大日記』昭和14年8月）。なお、予定第二報には陸軍省工政課によるメモが添付されており、そこには、「日産重工業王子工場」は「日産化学工業王子工場」の誤りではないかという指摘のほか、「宮田製作所蒲田工場」は「軍ノ秘密工場」であるため「秘密職場以外」を見学させるようにとの記載がある。
- (86) 次官より拓務次官宛「回答」1939年8月8日（防衛省防衛研究所所蔵『壹大日記』昭和14年8月）。
- (87) 近衛歩兵第一連隊の観覧時間は、9時から約1時間半となっている。
- (88) 当時の大阪市長は、坂間棟治。
- (89) 『大阪朝日新聞：奈良版』1939年8月19日付け5面。

- (90) 当時の岡崎市長は、菅野経三郎。
- (91) アントン（1940）。
- (92) アントン（1940：40）。
- (93) 南洋庁内務部企画課（1941：138）。
- (94) 千住（2006：60）。
- (95) 南洋庁内務部企画課（1941：138）。
- (96) 『京都日日新聞』1939年8月15日付け7面。
- (97) 加藤勝吉は南洋庁財務課所属であるが、佐藤と坂本の詳細は不明。
- (98) 『大阪時事新報』1939年8月17日付け3面。
- (99) 『大阪毎日新聞：愛知版』1939年8月21日付け5面。
- (100) 『大阪朝日新聞』1939年8月17日付け7面。
- (101) 『伊勢新聞』1939年8月21日付け3面。
- (102) 『京都日日新聞』1939年8月15日付け7面。
- (103) アントン（1940：40）。
- (104) 3回の観光団における個別訪問先に関する考察は、委任統治期における全観光団の動向を踏まえながら、稿を改めて行ないたい。
- (105) 委任統治期における観光団の平均内地滞在日数は、22.2日。
- (106) 1923年から1928年にかけて実施された観光団は、名古屋を訪れている。
- (107) 委任統治期における観光団の平均参加人数は、20.2人。
- (108) 1938年5月からはじまった橿原神宮の拡張工事および建国奉仕隊については、以下を参照のこと。鈴木（1985：205-209）。なお、鈴木によると、当該工事に建国奉仕隊として関わった人数は延べ121万4,081人であるが、そのうち「外国」に属する者は118名となっている。

参考文献

- アルボコン1938「観光団日誌」（『日の光』20：22-32）。
- アントン1940「内地観光から帰つて：村の島民同胞に訴ふ」（『南洋群島』6（2）：40-45）。
- 鈴木良1985「『建国の聖地』奈良」（鈴木良編『奈良県の百年：県民百年史29』山川出版社：197-212）。
- 千住一2006「委任統治期南洋群島における内地観光団に関する覚書」（『立教大学観光学部紀要』8：59-64）。
- 千住一2009「植民地統治と「観光」政策：日本統治下南洋群島における内地観光団を事例に」（寺前秀一編『観光学全集第9巻：観光政策論』原書房：227-259）。
- 千住一2012a「委任統治期南洋群島における内地観光団（1922-1924年）」（『奈良県立大学研究季報』22（4）：123-136）。

研究ノート

- 千住一2012b「委任統治期南洋群島における内地観光団（1925-1927年）」（『奈良県立大学研究季報』23（1）：57-73）。
- 千住一2013「委任統治期南洋群島における内地観光団（1928-1930年）」（『奈良県立大学研究季報』24（1）：59-94）。
- 千住一2014a「委任統治期南洋群島における内地観光団（1931-1933年）」（『奈良県立大学研究季報』24（3）：39-75）。
- 千住一2014b「委任統治期南洋群島における内地観光団（1934-1936年）」（『奈良県立大学研究季報』25（1）：37-72）。
- 曾根地之2003「南洋群島における神社の実態とその展開」（『大阪国際平和研究所紀要：戦争と平和'03』12：47-59）。
- 南洋群島1938「南洋からの観光団：その日程表」（『南洋群島』4（8）：55）。
- 南洋群島教育会1938『南洋群島教育史』南洋群島教育会。
- 南洋庁1932『南洋庁施政十年史』南洋庁長官々房。
- 南洋庁長官官房文書課1939『第七回南洋庁統計年鑑』南洋庁長官官房調査課。
- 南洋庁長官官房文書課1940『第八回南洋庁統計年鑑』南洋庁長官官房調査課。
- 南洋庁内務部企画課1941『第九回南洋庁統計年鑑』南洋庁内務部企画課。
- 日本図書センター1997『旧植民地人事総覧：樺太・南洋群島編』日本図書センター。

表1 第16回内地観光団（1937年）の予定

日数	月/日	曜日	「観光場所」
1	7/25	日	横浜着上京、宮城遙拝、宿舎着、健康診断
2	7/26	月	東京出張所、拓務省、日比谷公園、日本郵船会社
3	7/27	火	築地魚市場（早朝）、水産講習所、芝浦冷蔵、製氷庫
4	7/28	水	大日本人造肥料会社王子工場、合同油
5	7/29	木	専売局業平工場、浅草、上野松阪屋、上野動物園
6	7/30	金	明治神宮、外苑、貯金局、近衛歩兵連隊
7	7/31	土	新宿御苑、羽田飛行場
8	8/1	日	買物（三越、松阪屋、高島屋等）
9	8/2	月	日本赤十字社病院、日本劇場
10	8/3	火	宮田自転車工場（蒲田）、日産自動車工場、東京搾油工場（横浜）
11	8/4	水	靖国神社、遊就館、国防館、東宝劇場
12	8/5	木	東京出発（午前十時三十分）岡崎着（午後四時二十分）一泊途中富士山、大井、天竜川等ノ説明
13	8/6	金	安城農村ノ実地視察碧海郡農会、種畜場、満鉄飼料研究所、板倉農場農事試験場、岡崎公園、岡崎発（午後四時二十分）京都着（午後七時五十分）
14	8/7	土	京都市役所、東本願寺、新京極
15	8/8	日	叡山遊覧、京都発大阪着（午後五時頃京都発約一時間）
16	8/9	月	大阪市役所、観光艇ニヨリ水都観光、大阪城、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
17	8/10	火	適当ナル硝子工場、造幣局、鐘紡工場
18	8/11	水	伊勢神宮、道頓堀、心斎橋
19	8/12	木	大阪放送局、宝塚遊園地、阪急デパート
20	8/13	金	適当ナル貝釦工場及パナマ帽工場、浜寺農業博物館、海水浴場
21	8/14	土	大阪発、横浜着（特急）
22	8/15	日	横浜市中見物
23	8/16	月	横須賀工廠、軍艦拝観、三笠参観
24	8/17	火	近江丸乗船、内地出発

出典）拓務次官萩原彦三より海軍次官山本五十六宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1937年7月7日に付属の「観光団日程表」（防衛庁防衛研究所所蔵『昭和十二年公文備考E：教育(演習)、検閲』2）。

注）「観光場所」という表記は出典のママ。

表2 第17回内地観光団（1938年）の予定

日数	月/日	曜日	「観光場所」
1	7/29	金	横浜着上京、宮城遙拝、宿舎着、（予定軍人会館）、健康診断
2	7/30	土	東京出張所、拓務省、日比谷公園、日本郵船会社
3	7/31	日	休養（希望者は教会）、午後明治神宮並外苑
4	8/1	月	日本化学工業株式会社王子工場、合同油脂王子工場
5	8/2	火	貯金局、日本赤十字社病院、東宝劇場
6	8/3	水	新宿御苑、近衛歩兵連隊、靖国神社、遊就館、国防館
7	8/4	木	上野動物園、上野松阪屋、専売局業平工場、浅草
8	8/5	金	羽田飛行場、宮田自転車工場（蒲田）、東京搾油工場（横浜子安海岸）
9	8/6	土	築地中央市場（或は神田青物市場）、水産講習所、芝浦冷蔵
10	8/7	日	買物（三越、松阪屋、高島屋）、希望者は教会、銀座夜景
11	8/8	月	東京出発（午前十時三十分急行）、岡崎着（芳野屋）、（午後四時二十分）（手荷物京都へ送る）、途中富士山大井川天竜川等説明
12	8/9	火	安城農村の実地視察碧海郡農会、種畜場、坂倉農場、農事試験場、岡崎公園 岡崎発（午後四時二十分）、京都着（日吉屋）、（午後七時四十九分）
13	8/10	水	京都市役所、東本願寺、新京極
14	8/11	木	植物園、下賀茂撮影所、東山一清水寺、京都発（午後四時頃）一大阪着
15	8/12	金	叡山遊覧、（午後五時頃京都発約一時間）
16	8/13	土	大阪市役所、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、観光艇により水都観光
17	8/14	日	造幣局、鐘紡淀川工場、奈良行（午後一時頃上本町大軌電車乗車）、午後四時頃奈良発、宇治山田行（途中西大寺八木乗換）、宇治山田着（午後六時頃）
18	8/15	月	伊勢神宮、二見ヶ浦、宇治山田発（午後三時頃）、大阪着（午後五時頃）
19	8/16	火	適当なるパナマ帽製造工場及貝釦工場、浜寺農業博物館、海水浴場
20	8/17	水	大阪放送局、宝塚遊園地、阪急デパート
21	8/18	木	大阪発（午前九時三十分急行）、横浜着（午後七時十一分）
22	8/19	金	横須賀海軍航空隊、横須賀海軍工廠、軍艦拝観、三笠参観
23	8/20	土	横浜市中見学
24	8/21	日	山城丸乗船、内地出発

出典）南洋群島（1938：55）。

注）「観光場所」という表記は出典のママ。

表3 第17回内地観光団（1938年）の行程

日数	月/日	曜日	訪問場所および行動
1	7/30	土	横浜に到着、東京へ移動、宮城遙拝
2	7/31	日	教会、明治神宮、海軍館
3	8/1	月	拓務省、南洋庁東京出張事務所、海軍省、日比谷公園、拓務大臣官邸、東京市役所、郵船ビル
4	8/2	火	日本人造肥料会社、日本油脂株式会社王子工場、上野松坂屋、浅草
5	8/3	水	新宿御苑、乃木神社、近衛第三連隊、南洋貿易
6	8/4	木	貯金局、赤十字病院、美松食堂、靖国神社、南洋興発との会食、宝塚レビュー
7	8/5	金	上野動物園、専売局、国技館
8	8/6	土	宮田製作所、東京飛行場、多摩川園、雅叙園
9	8/7	日	三越、後樂園球場
10	8/8	月	魚市場、製氷所、水産講習所、コブラ組合
11	8/9	火	東京を出発、岡崎に到着
12	8/10	水	岡崎種畜場、農場、岡崎公園、板倉農場、京都へ移動
13	8/11	木	京都市役所、本願寺、八百政食堂
14	8/12	金	植物園、清水寺、〔J0スタジオ〕
15	8/13	土	比叡山、京都を出発、大阪へ到着
16	8/14	日	放送局、農業博物館、海水浴、高島屋
17	8/15	月	パナマ帽子製作所〔パナマ商会工場〕、宝塚
18	8/16	火	橿原神宮、伊勢へ移動
19	8/17	水	伊勢神宮、二見ヶ浦、奈良
20	8/18	木	鐘紡株式会社、中央公会堂、大阪朝日新聞社
21	8/19	金	大阪を出発、横浜へ移動
22	8/20	土	南洋油脂株式会社、震災記念館、横浜記念館
23	8/21	日	野澤屋
24	8/22	月	横須賀鎮守府
25	8/23	火	横浜を出発

出典) アルボコン（1938）、各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注) 〔 〕内の記述は新聞報道にもとづく。

表4 第18回内地観光団（1939年）の予定：第一報

日数	月/日	曜日	「観光場所」
1	8/6	日	横浜着上京、宮城遙拝、宿舎着、健康診断、休養
2	8/7	月	東京出張所、拓務省、日比谷公園、市役所
3	8/8	火	明治神宮参拝、海軍館、神宮外苑、第一陸軍病院慰問（牛込）
4	8/9	水	貯金局、日本赤十字社病院（青山）、靖国神社参拝、遊就館、国防館
5	8/10	木	上野動物園、専売局業平工場、東宝
6	8/11	金	日産重工業株式会社（王子工場）、日本油脂王子工場、松坂屋、浅草
7	8/12	土	宮田工場、羽田飛行場
8	8/13	日	三越買物（希望者ハ教会へ）、銀座見物
9	8/14	月	築地中央卸売市場（午前五時頃宿舎発）、芝浦冷凍会社、近衛歩兵第一連隊
10	8/15	火	東京発（午前一〇時三〇分急行）、岡崎着（午後四時二〇分）
11	8/16	水	種畜場、板倉農場、農事試験場、岡崎公園、岡崎発（午後四時二〇分）、京都着（午後七時四〇分）
12	8/17	木	京都市役所、東本願寺、清水寺、下加茂撮影所
13	8/18	金	叡山遊覧、京都発（午後五時頃）、大阪着（午後五時三〇分頃）
14	8/19	土	鐘紡淀川工場、大阪市役所、観光艇ニテ水都見学、大朝、大毎両新聞社訪問
15	8/20	日	浜寺農業博物館、浜寺海水浴場
16	8/21	月	大阪中央放送局、パナマ工場、大阪発（午後）、奈良公園、宇治山田着
17	8/22	火	伊勢参宮、二見ヶ浦（午後六時五十九分二見発）
18	8/23	水	横浜着、市中見物、乗船準備
19	8/24	木	横須賀海軍工廠、海軍航空隊、軍艦三笠参観、海軍病院
20	8/25	金	横浜丸乗船内地発

出典 南洋庁長官北島謙次郎より陸軍次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1939年7月22日に付属の「昭和十四年度観光団日程」（防衛省防衛研究所蔵『壹大日記』昭和14年8月）。

注 「観光場所」という表記は出典のママ。

表5 第18回内地観光団（1939年）の予定：第二報

日数	月/日	曜日	「観光場所」
1	8/6	日	横浜着上京、宮城遙拝、軍人会館着、健康診断、休養
2	8/7	月	東京出張事務所、拓務省、日比谷公園、市役所、丸ノ内市街
3	8/8	火	明治神宮参拝、海軍館、神宮外苑、靖国神社参拝、遊就館、国防館
4	8/9	水	日本赤十字社病院、貯金局、三越、銀座見物
5	8/10	木	上野動物園、松坂屋、専売局業平工場、劇場
6	8/11	金	日産重工業株式会社（王子工場）、日本油脂王子工場、浅草
7	8/12	土	近衛歩兵一連隊、宮田工場、羽田飛行場
8	8/13	日	築地中央卸売市場（午前五時頃宿舍発）、芝浦冷凍株式会社、退京準備
9	8/14	月	午前八時五十分東京駅発（臨時燕）、午後四時十五分京都着
10	8/15	火	京都市役所、東本願寺、清水寺、下加茂撮影所、京極夜景
11	8/16	水	叡山遊覧、京都発（午後五時頃）、大阪着
12	8/17	木	鐘紡淀川工場、大阪市役所、観光艇ニテ水都見学、大朝、大毎両新聞社訪問
13	8/18	金	パナマ工場、浜寺農業博物館、浜寺海水浴場
14	8/19	土	大阪放送局、湊町駅発（午前十一時四十五分）、奈良着、奈良公園、午後二時五十五分奈良発、山田着（午後五時三十七分）
15	8/20	日	伊勢参宮、二見ヶ浦、午後一時十二分二見発、午後三時二十八分名古屋着、同三時五十分名古屋発、午後四時三十九分岡崎着
16	8/21	月	種畜場、板倉農場、農事試験場、午後一時四十八分岡崎発、午後七時一分横浜着
17	8/22	火	横須賀海軍工廠、海軍航空隊、軍艦三笠参観
18	8/23	水	横浜九乗船内地発

出典) 南洋庁東京出張事務所より陸軍次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1939年8月1日に付属の「昭和十四年度観光団日程」(防衛省防衛研究所蔵『壹大日記』昭和14年8月)。

注)「観光場所」という表記は出典のママ。